The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第二章　デザインの言葉たち
Author(s)	高安, 啓介
Citation	a+a 美学研究. 2017, 11, p. 53-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90134
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

に日本民藝館を設立した。一九四〇年代の後半から、各地で民藝協会の発足、民藝館の開館が相次ぐなど、全国的な運動展開の隆盛が始まった。

*4 その他の語としては「国際哲学者会議」がある。原稿文中では「先年ハワイで国際哲学者会議があった時も、先生の講演は最も人気があったというが、…」と書かれている。「先生」、すなわち鈴木大拙は一九四九年六月、ハワイ大学にて第二回東西哲学者大会に出席、また一九五九年六月にも同じハワイ大学にて第三回東西哲学者大会に出席した。「国際哲学者会議」は第二回東西哲学者大会と思われる。

*5 前掲書、六―七頁、引用。

*6 柳宗悦「国際工藝家会議」『毎日新聞』(昭和二七年八月二一日)より引用。なお、会議の全容、参加者の講演については、藤田治彦監修『ダーティントン国際工芸家会議報告書―陶芸と染織一九五二年』(思文閣出版、二〇〇三年)参照。

*7 柳宗悦『美の法門』一九四九年『柳宗悦全集第一八巻』二四―二五頁、引用。

*8 柳によれば、一九五二年十月のアメリカ滞在中、大拙とは三度会ったという。柳宗悦「先生を訪ねて」一九五三年『柳宗悦全集第一四巻』四七三頁、参照。

*9 柳が亡くなる前年、一九六〇年に行われた柳と大拙との対談にて、柳は、「東洋の美の深さを知らせる新しい美学が起こるべきだと思います。」と大拙に語っている。両者は共通の関心をもって互いに考えを深め合う様子がうかがわれる。鈴木大拙「禅者と妙好人について」『鈴木大拙坐談集第二巻』(読売新聞社、一九七一年)参照。

*10 柳宗悦「かけがへのない人」一九五九年『柳宗悦全集第一四巻』四八三頁、引用。なお、大拙が柳を評した一文を挙げたい。一九六一年、柳に先立たれた九〇歳の大拙が柳の告別式において述べたものである。大拙は柳を「天才の人」と評している。「君は天才の人であった、独創の見に富んでいた。それはこの民藝館の形の上でのみ見るべきでない。日本は大なる東洋的「美の法門」の開拓者を失った。これは日本だけの損失でない。実に世界的なものがある。まだまだ生きていて、大成されることを期待したのであったが、世の中は、そう思うようには行かぬ。」

*11 柳の「佛教と歐米思想」(一九五二年三月)、「先生を訪ねて」においても大拙評が述べられており、大拙が西洋において仏教、とりわけ禅を伝える業績を讃えるなど、「佛教を説く道」との内容の共通点がみられる。

*12 鈴木大拙「東洋と西洋」『鈴木大拙坐談集第二巻』(読売新聞社、一九七一年)参照。

*13 たとえば「民芸運動は何を寄与したか」の一文がある。この文章が掲載された、一九四六年の雑誌『工藝』百十五号と一九四八年刊行の単行本『民と美・下巻』との用語変化を比較検討すると、「仕事」から「使命」へと変化した例がみられる。文中の用語変化は「使命」以外にもなされており、柳の明確な意図によって語が選択されたといえよう。引用文の傍線は筆者による。

「現在の實用工芸の衰頽を救うためには、作家と職人との協同作業が望ましいのである。ここに又個人作家の新しい仕事がある。作家は寧ろ職人の中に自己の仕事を見出さねばならぬ。」『工芸』百十五号(一九四六年)。

「現在の實用工芸の衰頽を救うためには、作家と職人との協同作業が最も望ましいのである。ここに個人作家の新しい使命があると思われる。作家は寧ろ職人の中に自己の仕事を完成させねばならぬ。」『民と美・下巻』(一九四八年)。

なお、一九五四年に改めて「民藝運動は何を寄与したか」が刊行された際も「使命」をはじめ、語の変更は残されている。

第二章　デザインの言葉たち

デザインの言葉たち

英語のデザインの語はいまや各国語の語彙のうちに入って使用されているが、今日のように広く使われるようになったのは、英語圏以外ではおおむね第二次大戦以後とみてよい。そしてそう考えると、前近代の「デザイン」をどう語るのか、非西洋の「デザイン」をどう語るのか、という問題がでてくる。すなわち、今日とは条件もまるで異なりデザインの語すら使われてなかった文脈において「デザイン」とは一体何であるのか。それは自明でない。したがって、各時代ならびに各地域について研究をおこなうとき、デザインに対応する語をみつけて意味をたしかめる必要がでてくる。

日本語において「意匠」の語はふるくから使われており、近代になってデザインの訳語として使われた。意匠法という名称にその名残がみとめられる。中国語では「設計」がデザインの訳語となっているが、近代日本において「設計」の語もまたデザインをあらわす語の一つではあった。けれども、明治大正期において「図案」の語が、教育機関の名称として採用されたため、デザインに対応する語として広く認められた。このとき「工芸」の語にとともに「図案」の語がもちいられることが多く、当時の「図案」とはすなわち工芸にあたえる装飾にほかならなかった。けれども一九二〇年代、大正から昭和にかけて西洋から近代デザインの考えが入るにつれて「図案」をデザインの訳語とするのが不自由に感じられてくる。近代デザインの理念をもっとも端的にあらわしたのは「構成」の語だった。日本語の「構成」は、コンポジションでもあり、コンストラクションでもあり、二つの鍵語を同時に含みうる便利な語だった。近代デザインを促進するうえで「造形」の語もまたドイツ語のゲシュタルトゥングとの対応をにおわせながら事実上デザインをあらわした。日本語で「デザイン」の語はもともと服飾の分野でもちいられていたが、一九五〇年代後半から一九六〇年代前半かけて広く使用されるようになった。たとえば一九五七年のグッドデザイン認定制度のように組織制度の名称のうちに使用されるようになる。学校教育でも一九五八年の学習指導要領の改訂においてデザインの語がはじめて現れる。一九六四年の東京オリンピックまではデザインの語はおそらく輝きを放っていただろうが、現在では何にでも言われる陳腐な語になった。

言葉の意味の詮索はそれ自体のためではなく、背後にデザイン思想の移り変わりをみるためである。英語のデザインに対応する語だけではなく、デザインを論じるときに使用される諸々の語もまたデザイン思想をたどる重要な手がかりとなる。時代によって使用される語がどのように変わっていくのか、同一の語がずっと使われ続けている場合においては意味がどのように変化しているのかに着目するならば、時代特有の事情がわかるだけでなく、地域特有の問題もあきらかになる。そしてこのような方法を取ろうとするとき、美術系の教育機関にかかわる名称すなわち、学校名・学科名・科目名はとくに有力な手がかりとなる。次章で紹介するデザイン教育史はそういった観点からも意味深い。

（高安啓介）

参考文献

Haruhiko Fujita, ed. Words for Design I II III: Comparative Etymology and Terminology of Design and its Equivalents. JSPS, 2010.（増補CD版）

共同研究
藤田治彦　科学研究費基盤研究（B）二〇〇七―二〇〇九年度
比較デザイン論研究―意匠・構想・設計・創造論の歴史的展望